



ペンギンを 蒸す機械

笹帽子

空を飛ぶ夢を見ていた。

「ジェイムズ！」

私の幸福な夢を破ったのは、相棒が私の名を呼ぶ声だった。ドタバタと激しい足音を艦内に響かせ、私の居室の鋼鉄の扉を叩く。

「ジェイムズ！ 起きろ！」

「もう起きていますさ」

実際、私の意識はすでに完全に覚醒していた。寝かせた頭をゆっくりと起こす。

この仕事は嫌でも眠るのがうまくなる。立ったままどのような姿勢で眠れば、効率よく疲労を回復できるか。何かあれば、気配を察知して瞬時に目覚められるのか。それを身体が覚えるようになる。長く退屈な船旅でも、染み付いたそれは変わらない。

「陸地が見えるぞ！」

興奮するロバートの後を付いてよたよたと操舵室に入ると、潜望鏡には真っ白な大地が写っていた。

荒涼とした大地。草一本生えない大地。

それでいて、生命力を感じさせる、白。

「南極だ……」

ロンドンを出て実に半年の長旅であった。

「ついに辿り着いたか」

「そのようだ」

「助かったぜ、そろそろあのイカれた羊キウイには嫌気がさしてたんだ」

最後の寄港地であるニュージーランドで調達できた食べ物は限られており、潜行したままゆっくりと南極に辿り着くまで、私たちはたいそう苦しめられた。

羊キウイ缶はその最たるものである。

「そもそもキウイで羊肉の臭みを消そうという発想が意味わからん。消えるどころかあれは、逆だ、あれは、なんというか……逆に育つ」ロバートが毒づく。

「心底同意するが、南極に付いたからといって他の食べ物はあるのか」

「奴らからかっぱらうんだよ。ドイツの連中なら、きっとここでも芋を育てる方法くらい見つけてるだろうぜ」

「なるほど」私はなるほどと思った。

「よし、芋のためにも作戦開始と行こうじゃないか」

ロバートはパンパンと手を叩き、今一度、作戦名を復唱する。

「ポテト作戦だ」

ポテト作戦ではなかった。

正式には、『南極における不審施設調査』とか、そういう当り障りのない名前だったはずだ。

最も、通達書類など無いし、実際に上層部がなんと呼んでいるかは私も知らない。おそらく暗号名があるはずだ。いっそ私たちの間では暗号名ポテト作戦でも良いかもしれない。そういえば私も腹が減っている。

「減圧を開始しよう。自爆装置の期限は三日だ」

今回の私たちの任務には、超長距離航行潜水艦ヴァイオレットが与えられていた。隠密作戦であり、私たちは今や、公式に英国海軍に軍籍を持ってはいない。この潜水艦も、存在しては困るものだ。

だから、三日間たって、私たちのどちらもが戻れなかった時。その時は、ヴァイオレットは爆沈と相成る。

ウォーターロックを閉じ、注水を開始する。足元から冷たい水が上がってくる。

「これが南極の水か」

「やはり冷たいな」

そうは言っても、私たちは水中での隠密行動を可能とするメカニカル・フィンをつけ、水に体温を奪われないゴムスーツを着用している。実際にはその冷たさを感じることはない。

「ジェイムズ、だが言っただろう、本当は南極は俺たちの故郷かもしれないんだぜ」

「またその話か」

ロバートには一度読んだ本の話は何度もする悪癖があった。それは二人きりの長い船旅には――それも潜水艦での隠密行動には――あまり良くない性向であることに違いなかった。私は忍耐力を試されていた。

「最新の進化論の研究だ。動物の身体の特徴には意味があるんだと。麒麟の首が長いのは、背の高い植物を食べるのに都合が良かったから、その特徴が生き残った結果だ。けれどこの理屈は、俺たちのように、自分で環境を切り拓く連中にはなかなか当てはまらない。だが、自分で環境を切り拓くようになったのは最近のことだろう。女王陛下の船が世界を駆けまわるようになったのは最近のことじゃないか。では昔はどうだったか？」

当然、私たちはより寒い土地で生まれたと考えるのが自然である。

北だ。誰もがそう考えていた。

凍てつく水が私たちの腰まで上がってきた。

「けれど、最近わかったのは、北極では温度が足りないんだと。北極と南極じゃ、二十度は違うらしい。南極のほうが広いし、標高が高くなるからな」

ロバートが読んだ本によれば、北極では私たちのこの身体の特徴を十分に説明できないが、南極ならばその余地があるという。

「だが、それなら俺たちのご先祖様は、どうやって北半球までやってきたんだ。泳いで赤道を超えたのか？」

それは半年間の道中、私が何度も繰り返した問であり、反論だった。ロバートの答えはいつも決まっていた。

「誰も俺たちの赤道越えに気付いちゃいない。ご先祖様もきつとうまくやったさ。俺たちはそれ

くらいできる。俺たちは進化する」

口元まで水がやってきて、私たちの会話はそこで終わる。

私たちは水中を、メカニカル・フィンで水を蹴って進んだ。

ケープタウンであれだけ特訓したが、いまだに気を抜くと腕を使ってしまう。腕は広げず、身体に密着させているのが正しい。それが最も疲労を抑え、目的地に辿り着いた後の行動のために体力を温存する方法である。しかし悲しいかな、腕がそこにあれば、どうしても使いたくなってしまふのが生物というものだった。これがロバートの言う、身体の特徴の意味かと私は考えた。両足を交互に動かすこの泳ぎ方は、私の身体に刻まれた意味とはずれていた。

私たちは岬の向こう側、湾の奥にあるという『港』を目指す。

南極に、ドイツが秘密基地を建造中である。

諜報局がその情報を得たのは一年前。彼らは巨大な工廠を南極に設置し、そこで何らかの兵器の建造を行っている、というところまでは見えてきた。だがそれが何なのかはわからない。その組織の正体は漠として知れなかった。だがドイツ帝国の息がかかっていることは間違いないと私は教えられた。

湾の内側に入ると、とたんに海水の温度が上がる。微かなものだ、上がったと言っても、依然として極寒の海であることには変わらない。しかし、私たちは確かに、何かの気配を感じ取る。ロバートに目配せすると、私たちはゆっくりと浮上する。海面からそっと顔を出す。

はじめ、何も見えなかった。

私は最初、急に天気が悪くなり吹雪いているのかと思った。

違う。

その白い湯気が、蒸気が、晴れる。

湾の奥に浮かび上がるのは、巨大な円筒形の建物だった。

錆びついた表面の亀裂からもうもうと湯気が吹き出し、悲鳴を上げているように見える。

頂上には無数の鋼鉄の腕が飛び出し、ザクザクと動く。自らの内臓をかき回しているようにも、あるいは天へ向けて助けを求めもがいているようにも見える。

水面に出るまで気付かなかったが、周囲は謎の円筒から吐き出される蒸気と湯気で満たされ、風の流れによってはほんの1メートルと離れていないロバートの表情もわからない。それなのに巨大な円筒は異様な存在感を放つ。

それは神話のように。悪夢のように。この南の最果てに佇んでいた。

「あれは……」

私は油断していた。

湯気で視界が悪い中、前方の構造物に集中しすぎた。長い船旅が、やはり私の勘を鈍らせたのかもしれない。あるいは羊キウイ缶が悪かったのかもしれない。後者である可能性が高い。

ズザザ、と激しく水を割く音がしたかと思うと、私たちは囲まれていた。

「動かないように。十人の狙撃手がお前たちを狙っている。この自動機械にも爆薬が積まれている。それぞれこの鎖で身体を固定しろ」

水面から、十台ほどのロボットが顔を出し、私たちを取り囲んでいる。サイレンススクリーンで器用に立泳ぎをしている。警告を寄越した音声は特に言わなかったが、このロボット兵士それぞれも私たちに銃口を突きつけている。

万事休す。

ロバートと目を見合わせる。

「ディナーのご招待というわけか」

「お前、招待状持ってるか」

「持っているさ」ロバートは空中を見上げて言った。彼がウソを付くときに良くする仕草だった。「ジェームズ、お前の分は無いけどな」

「早くしろ。鎖で身体をつなぐんだ」

ロボット兵士のスピーカーから聞こえてくる英語がしっかりとしたクイーンズ・イングリッシュなのに私は驚かされる。最近のドイツ軍人はこうなのだろうか。

私たちの正面の二台が、鎖を捧げ持って進み出る。この姿勢制御は大したものだが、ロボット自身で私たちを拘束できるほどの技術ではないらしかった。もっとも、そんな高度なロボットは世界のどの国だって未開発だろう。

「俺たちをどうする気だ」

私は鎖を自分の腰に回す。

「手錠もだ」

スピーカーの音声は質問に答えない。マイクはついているのかもしれないし、ついていないのかもしれない。まあ、狙撃手がこちらを狙っているのなら必要なだろう。

「そういや、芋はいいんだが、俺はあのキャベツは苦手なんだ。出ないといいけどな」

そう言いながらロバートが俺の分の手錠をかけてくれる。

「ついてこい」

私たちはロボット兵士に曳航されて進んでいく。

「やはりあの円筒へ向かうようだな。あれが港だろうか」

私は蒸気に目を凝らす。

「あれは港というより、工場だな」

ロバートが言う。

「……一体何を作っているのだろう」

私は捨鉢だった。半年かけた隠密任務は完全に失敗だ。だが個人的な興味はあった。こうして何も知らぬふりをしていれば、ドイツ兵は私を殺す前に何か口を滑らせるかもしれない。

「あれはペンギンを蒸す機械だよ」

ロバートが奇妙なことを口にする。

「……ペンギンを蒸す？」

「そうだ。ペンギンを蒸すんだ。油を取るんだよ」

「馬鹿な。神話の話だろう」

しかしそう言われてみれば確かに、あのシルエットは、幼いころに教わったペンギンを蒸す機械そのものであった。

「神話だと誰もが思っていたさ。だが、実際に出土した。ここ、南極の氷の中から見つかった」

「どういうことだ……？」

「もちろん、今のあれは、かつて人間がやったのとは違って、本当にペンギンを蒸しているわけじゃないぜ。そんな罪深いこと、俺たちには出来ない。同族を蒸すなんてできるわけないだろう。けれど、目的は同じだ。ペンギンを蒸す機械が何のためにペンギンを蒸していたか、ジェイムズ、覚えているか」

「おい、ロバート、お前……」

兵士に引きずられながら身体をよじる。もうもうと流れてくる湯気で、すぐ隣りにいるロバートの表情は見えない。

「空を飛ぶためだよ。ジェイムズ。生まれ変わったペンギンを蒸す機械は、今度は俺たちペンギンのために空を飛ぶんだ。この飛べないフリッパーしか持たないペンギンが、身体に刻まれた意味を打ち破って空を飛ぶための道具だ。分かるだろう。あれは」

兵士がピタリと止まり、私はつんのめる。曳航は終わる。どこかに着いたらしい。

「あれは、飛行艇だ」

ごうと風が流れ、ロバートのニヤリと笑う顔が頭になった。

「俺たちは進化する」

「ロバート・スコット中佐」

スピーカーの言う。

「長旅お疲れ様でした。シャックルトン司令がお待ちです」

氷の女王(1)

シュウシュウという熱を含んだ音が反響する。くぐもった音が充満する。

ここは蒸気の帝国である。

あるいは、地獄かもしれない。

ときおり天井から落ちてくる水滴が私の顔にかかり、私は目を細める。低い天井にも圧迫感はなく、私は母体に収まった胎児のような安心を感じている。

熱が身体を溶かしていくようだ。

私は木製の椅子に腰掛け、そのまま目をつむってしまう。

自分の身体の境界が曖昧になり、まとわりつく蒸気と、身体の脂なのかなんなのかわからないものが――あるいはペンギン油が――渾然一体となって、世界の内と外をぼかしていく。

炉にくべられた燃料は緩慢な燃焼を続け、部屋の温度を上げる。

私たちは蒸されている。

鋼鉄の天井ががぱりと開き、ウォームギアが一回転して灼熱した石の上に一定量の水を滴下する。計算され尽くしたそれはすべて残らず蒸気となり、あるいはしかし、次の瞬間ではこらえきれずに湯気となり、空間を更に濃く、熱く、満たしていく。私の肺の中にも熱は入り込む。私の血管にも入り込む。私の脳にも。魂にも。

私たちは蒸されている。

ペンギンたちは蒸されている。

「極楽だ……」

ロバートが白樺の葉で身体を叩きながら言う。

「葉草サウナとは、シャックルトン司令も粋な計らいをする。狭い船に押し込められて、その後に寒中水泳ときたら、こうでもしなけりゃ身体がいかれちまうからな」

アーネスト・シャックルトン。

市井の冒険家として名の知れた男ではあったが、十年も前に南方で客死したと聞いていた。

その死は偽装であったということだ。

哨戒部隊が我々に施した拘束を丁重に詫びたシャックルトンは、客人をもてなす豪邸の主人が如く、私たちにサウナを勧めた。

それだけだった。

説明はなかった。

「ロバート、いろいろ聞きたいことはあるが……」

山ほどあった。

「ペンギン油が絞り尽くされる前に済む程度ならな」

私はタオルで身体の水滴を拭う。

「なぜ黙っていた」

ロバートは明らかに、この施設を知っていた。

「なにがドイツの秘密工廠だ。そんなものが一体どこにある。この施設は何だ。アーネスト・シャックルトン。あいつは何者だ」

ロバートは白樺の枝を投げてよこした。私は受け取らない。

「ドイツの施設は実在する。諜報部が掴んだ情報は間違っていたわけではない。だが場所は間違いだ。ドイツ帝国の採掘拠点は西に800海里ほど行ったところだ。この施設はさっき言った。『ペンギンを蒸す機械』だ。その採掘現場であり、復元現場でもある。最後の質問にはこう答えよう。アーネスト・シャックルトン司令。この『機械』の発見者。冒険家だ」

まくしたてたロバートが大袈裟に息をつく。

「最初の質問に答えていない」

なぜ黙っていた。

なぜお前だけが、真の任務を知っていた。

なぜ私だけが、嘘の任務を教えられていた。

なぜそれを、半年間の旅路で、私に隠し続けていた。

「……悪かったよ」

ロバートは俯いて言った。

「本当のことを言っても、お前は来ないだろうと思ったからな」

「改めて、貴方がた二人のご協力に感謝いたします。ここまでの隠密の航海、大変なご苦勞であったことでしょう」

おそらく『蒸す機械』がたてる音であろう、轟音の遠く響く建屋の一室で、シャックルトンは鷹揚にそう言った。部屋の壁にはスチームラジエーターが迷路のように張り巡らされ、コンコンとハンマー音を立てながら熱を放射している。いや、恐らく壁だけではあるまい。床も微かに温かい。私は床下の迷路を想像する。口金を小さく絞ったオイルランプで部屋はほのかに照らされている。机には大量の書類と書物が整然と並べられ、すべての物体があるべき場所に収まっている。シャックルトンの執務机であろう。そこにいなければ居心地が悪いのだというように。彼の几帳面さがうかがえる。シャックルトンの巨体を収めるべき大きな椅子だけが空白である。この部屋の壁には、ほんの小さな覗き窓が二つ付いているだけだ。おそらく外気に熱を奪われぬためであろう。外からの光はそう望めない。オイルランプの仄明かりが揺れる。

私はここが南極であるということを忘れそうになる。

シャックルトンは司令と言ったが、それは形だけのものだろうと私は考えた。この柔らかい態度は、軍人上がりには思えない。まさか本当に冒険家だと言うのだろうか。馬鹿げている。

ロバートはサウナでのぼせたままなのか、饒舌だった。

「いやいや、むしろ快適なものでしたよ。科学技術は日進月歩だ。第一次探検隊のディスカバリ一号ではトポガン板でも移動がままならなかった。年中グラグラでしたからね。今回のヴァイオレット号は、船内を自由に歩き回れる。船の中にいることも忘れそうになりますよ。私は毎晩科学に乾杯したものです」

そんなのは半年間ついぞ見たことがなかった。適当な事を言うやつだ。

「そうですとも。我々は止まらない。我々は進歩する。我々は進化する」

シャックルトンは歌うように言った。

「.....それで」

私は咳払いをして言った。

「それで、私たち二人はここに無事到着した。それで.....？」

一瞬、二人はぼかんとする。

「ああ、ああ、そうでした」

シャックルトンは大きな身体を揺すって言った。

「そうだ、スコット殿。例のものを受け取らねば。それで貴方がたの任務は完了となるのだから。ええと、なんと言ったかね、作戦名は」

「ポテト作戦」

ロバートが真顔で言った。ポテト作戦ではなかった。

「ああそうそう、ポテト作戦ね」

ポテト作戦ではなかった。ないのだ。そうではなかったと私は信じたい。

ロバートが防水背囊のネジを開け、小さな包を取り出す。

茶色く煤けた紙に包まれた箱のようなものである。

「確かに。確かに受け取った」

シャックルトンは恭しく包を受け取り、透明なカプセルにそれを封じて、壁のパイプに差し込んだ。軽い空気音とともに、カプセルはパイプの先に消えていく。構内転送配管だ。シャックルトンはカリカリとダイヤルを回し、転送先をセットしている。

いまの包は一体何だったのだろう。私は自分だけが阻害されていることへの苛立ちがまた立ち上ってくるのを感じ、顔を背け小窓の外を見た。

到着した時には晴れていたが、今では吹雪が激しくなり、蒸気と相まって視界はほとんどなかった。巨大な円筒の影だけが、ゆっくりと振動している。

あれは、なんなのだ。

ここは、なんなのだ。

「ご覧になりますか、『機械』を」

背後にシャックルトンが近寄ってきたことに、私は気付かなかった。

「我々の希望を」

「ペンギン南極起源説をご存知ですか」

シャックルトンが言う。

「知っています」

飽きるほど知っている。ロバートが私の方を見てニヤリと笑う。私は無視する。

「我々の肉体の構造を考えると、北極よりもむしろ、南極で進化したと考えるのが妥当だという説ですね」

「その通りです。いや、それをご存知であれば話が早い」

私たちは機械仕掛けの動く床に載せられ、巨大なドームに覆われた空間を移動していた。左右には数メートル四方に切りだされた氷の塊がうず高く積まれている。時折、精密作業用の機械多指を背負ったペンギン技師たちがせわしなく動きまわり、何やら作業をしているのが見える。肩関節を繊細に上下させることで各アームを緻密に制御する、熟練の技術だ。天井のレールとパイプと歯車の隙間からぶら下がったチューブの先端を操作して、噴き出す高圧蒸気で氷の塊を切り崩したりしている。その湯気で、私はここが室内なのかがわからなくなる。

「南極に我々のルーツがあるとすれば、そこを調査したいと考えるのが道理です。もちろん、こう大変に寒い土地ですから、簡単にはいかない。それはまさに至難であり、極寒と闇に閉ざされた日々であって、危険の絶えない旅路でした。生還の保証などもちろんありません。しかし私は、成功の暁にあるはずの、名誉を夢見ました。私が望んだのはそれだけでした。そして見つけたのです。この『ペンギンを蒸す機械』を」

床が終点に到達し、私たちはカーゴリフトに乗り込む。

シャックルトンが壁のレバーを押し下げると、圧力弁の開放される音とともに、三人を乗せたリフトが上昇を始める。

「すでに南極の探査を開始しているのは、英国だけではなくありません。フランス、ドイツ、ロシア、米国、中国、日本まで……。皆が先を争って南極の氷を採掘しています。皆が必死です。皆が蒸している。芋を蒸し、子牛を蒸し、小籠包を蒸し、パンを蒸し、亀ゼリーを蒸し、テリーヌを蒸し、ヒラメを蒸し、アサリを蒸し、蒸籠で蒸し、タジン鍋で蒸し、土瓶で蒸し、地獄で蒸す。しかし、私は先手を取ることが出来た。オリジナルの『蒸す機械』を押さえたのです。そのとき共に旅をしていたのがスコット殿でした」

スコットが肩を小突いてくる。私は無視する。少しだけじわじわくる。

リフトは上昇を続ける。私たちは蒸気にすっかり覆われ、リフトの外は全く見えなくなる。

「私の専門はもともと考古学や歴史学ではありません。ここで神話の研究をするつもりはなかった。しかし、発掘された『蒸す機械』は完全でした。私はすぐにそれが、復元でき、動作可能であることを理解しました。『ペンギンを蒸す機械』は神話の中の存在ではなく、実在するアーティファクトでした」

リフトはなおも止まらない。蒸気の声が少しずつ近づいてくる。前方に、何やら影が大きくなってくる。私たちはそれに、近づいている。

ふ、と風が一際大きく吹いた。

「復元はかなりの所まで来ています。ほぼ起動可能な状態と言っていい。この『ペンギンを蒸す機械』は、すべてのペンギンを羽ばたかせ、救済する機構です。我々はこれを動かす。それこそが、陸を歩き、海を泳いできた我々ペンギンの長い旅路の終着点なのです」

湯気が払われると、巨大な『ペンギンを蒸す機械』が明らかになる。

上部から突き出した無数の『腕』は関節を上下させ、蒸気をかき分ける。落としてしまった何かを求めるように。『腕』が差し込まれた内側の肉壁の様子までは、ここからでは窺い知れない。またそこも蒸気に覆われており、近寄ったとしても良くは見えない。錆びついた鋼鉄製の躯体は打ち震え、無数のヒビ割れから一定のリズムで蒸気が噴き出す。周辺に張り巡らされたストラットチャンネルの上で、チューブまみれの小型作業ロボットが作業している。それらは大きな蒸気の噴き出しを器用に塞いでいく。一箇所塞ぎ終わると自らの足場をドライバーで分解し、別の作業場へレールを伝って移動する。また自分の足場を固定して、蒸気の噴き出しを潰し始める。しかし、こちらを塞げばあちらが噴き、あちらを塞げばそちらが噴く。きりがなさそうに見える。

.....いや違う。ヒビは明らかに片面に、正確に言うならば斜めに傾いた20度ほどの区間に集中している。これはこちらが損傷しているというのではなく、残りの部分はすべて補修し終えたということだ。目を凝らせば、反対側の側面は、表面につややかな部分が多いことが分かる。褐色の錆の中に、光沢のある黒が混じる。

私は失った言葉を、ゆっくりと時間をかけて頭のなかで手繰り寄せ、三度組み立てた後、シャックルトンに向き直って口を開く。

「すべてのペンギンの飛翔と救済、それは象徴的なものですか」

シャックルトンは自分の嘴をそっと撫でる。

「象徴的であり、同時に实际的でも」

「いったい、これを動かした時、何が起こるのです」

その時だった。

ベルが鳴る。鳴り響く。耳を劈き、頭を割るような、けたたましいベルが鳴る。

「なんだね」

シャックルトンがリフトの柱にかけられた受話器を手にとって叫ぶ。構内電話だ。

ロバートが言う。

「かけてもいいが、ジェイムズ、お前は俺が口でこれを説明したんじゃ、馬鹿馬鹿しいと言ってロンドンへ帰っていただろう」

たしかにそうだ。特にジェイムズの口から話されたのでは、絶対に信じなかったに違いない。だが、それでも私は黙っていたことに関してロバートを許してはいなかったので、沈黙を守った。

「なに、本当か。待て……いや、待たなくていい。いやいや、『機械』の方の作業は一旦止めろ。当たり前だろう！ 順序を考えろ！ すぐにそちらへ行く。続けなさい」

シャックルトンが慌ただしく電話を切って、再びレバーを押し上げる。リフトがガラガラと下降を始める。

「スコット殿、ロス殿。もう一つ見ていただくものが出来ました」

シャックルトンはただならぬ表情だった。

「なんです、何か新しいものが出土したのですか」

「いいえ、実は半年前に発見したのです。今になって目覚めるとは……」

シャックルトンは額に手をやり、考えこんでしまう。

ロバートも半年前の出来事は知らぬらしく、私と不安げな表情を見合わせる。

「一体、何を見つけたのです。目覚めるとは。『蒸す機械』の他にも何か、神話の存在ですか。機能するものなのですか」

私は尋ねる。

「神話、ある意味ではそうでしょう。彼女が目覚めました」

「彼女？」

シャックルトンは再び、嘴をゆっくりと撫で付ける。

「私たちは彼女を、氷の女王と呼んでいます」

リフトは再び濃霧に覆われ、ゆっくりと降りていく。

「彼女は人間です」

ペンギン人間(1)

(神話・ペンギンを蒸す機械 現代ペンギン語訳)

むかしむかし、人間とペンギンは共に地上で暮らしていました。

二つの種族は手とフリッパーを取り合って、仲良く暮らしていました。

しかし、ペンギンと違って、人間たちは強欲で、プライドが高く、基本的に最悪なやつらなので、やがて喧嘩ばかりするようになりました。人間同士で戦うのです。戦争です。殺し合いです。人間たちは賢くて強い生き物です。ずっと戦い続けます。攻撃はどんどん激しく、残酷に、陰惨に、苛烈に、凄惨になっていきました。ペンギンたちは見ていられず、ついにカミサマにこの事を相談します。

するとカミサマは言いました。

「あなたたちはどう思うのですか。どうすれば、人間たちは争うのをやめるのでしょうか。あなたたちなりの答えを持って来なさい。私が叶えてあげましょう」

ペンギンたちは考えました。

「食べ物が足りないのでは？」

「そんなことはない。人間たちは十分すぎるほど食べている。食べ物がもっと増えても、戦争はやめないよ」

「お金が足りないのでは？」

「そんなことはない。人間たちは戦争に一番お金をかけている。お金がもっと増えても、戦争はやめないよ」

ペンギンたちは困ってしまいました。

なかなか納得のいく答えが出せないのです。

しかし、最後には一匹がこう言いました。

「蒸せばいいのでは？」

「なんだって？」

「この世界はとっても寒い。僕たちペンギンにはちょうどいいけれど、人間には寒すぎるのかもしれない。地球を蒸して、少しあたたかくしてやれば、人間は今よりもっと落ち着いて、戦争も減るのでは？」

「それだ！」

それではなかった。

それではありませんでしたが、しかしカミサマにそうペンギンがお願いすると、カミサマはこう言いました。

「わかりました。それではあなたたちにこの機械を授けましょう」

そうして授けられたのが、『地球を蒸す機械』でした。

「大地の恵みと、海の恵みをこの機械に捧げなさい」

ペンギンたちがそうすると、『機械』は唸りを上げて地球を蒸しました。

ペンギンたちが地球を蒸すと、地球の温度と湿度は高まり、人間は快適に暮らせるようになりました。人間たちは和平を結び、戦争は終わりました。世界に平和が訪れたのです。

密度が極めて高くなった超飽和水蒸気のなかで、ペンギンは悠々と空を飛んだといいます。

もちろん平和は一瞬で崩れました。

だって、ペンギンと違って、人間たちは強欲で、プライドが高く、本当に最悪なやつらなので、やっぱり喧嘩ばかりするのです。人間同士で戦うのです。戦争です。殺し合いです。人間たちは賢くて強い生き物です。ずっと戦い続けます。攻撃はどんどん激しく、残酷に、陰惨に、苛烈に、凄惨になっていきました。さらには、ペンギンにまで被害が及び始める始末。ペンギンたちは耐え切れず、ついにカミサマにこの事を相談します。

「しかし、あなたたち種族の願いは叶えたばかりです。そんなにすぐに次の願いというわけにはいかない」

カミサマもできるだけすべての生き物に公平に接しなければならないので、そのあたりは大変なのです。

しかし、ペンギンたちは本当に人間のことを友人として案じていましたし、何より今や彼ら自身が被害を被る側となっては、なんとしても人間の戦争を止めたいと思いました。カミサマに必死で頼み込むと、ついにはカミサマはこう言いました。

「特別な願いを叶えるには、代償が必要です」

ペンギンたちは驚きます。ヒソヒソとペンギン同士で話し合いを始めました。

「代償？」

「一体なんでしょう？」

「何を要求されるのだろう」

「食べ物を差し出さなければならないのでは？」

「そんなことはない。カミサマは食べ物には困っていないよ」

「お金を取られるのでは？」

「そんなことはない。お金なんてカミサマには必要ないのだから」

ペンギンたちは困ってしまいました。

なかなか納得のいく答えが出せないのです。

しかし、最後には一匹がこう言いました。

「蒸せばいいのでは？」

「なんだって？」

「ペンギンを蒸せば、地球はペンギンの優しい心で包まれるはずだ。あるいはペンギン油で。またこの間みたいに空も飛べるだろう」

「それだ！」

それではなかった。

それではありませんでしたが、しかしカミサマにそうペンギンがお願いすると、カミサマはこう言いました。

「わかりました。それではあなたたちにこの機械を授けましょう」

そうして授けられたのが、『ペンギンを蒸す機械』でした。

「大地の恵みと、海の恵みをこの機械に捧げなさい」

ペンギンたちがそうすると、『機械』は唸りを上げてペンギンを蒸しました。

その時に蒸されたペンギンたちは、今でもこの世界に蒸気となって漂っており（あるいはペンギン油となって）、その優しい心は私たちの平和と幸せを願っているのです。

ペンギン人間(2)

氷の女王は特別に用意された巨大な寝台の上に横たわっていた。

何しろ身長は私たちの倍ほどはある。人間サイズだ。

医者が彼女を診察している。

「体温が上昇しています。脈拍も通常に戻りました。いつ目覚めても不思議ではない状態です」
いや、いつ目覚めても不思議だ。私はそう思った。人間がここに存在している。それも生きた人間が。それだけで十分不思議だ。

氷の女王と呼ばれる人間は、金属製の容器の中に収められた状態で氷漬けになっていたという。おそらくそれは、人工的に冬眠を実現するような装置だったのではないか、とシャックルトンは言う。

彼女は一体どれほどの長い間、眠っていたのであろうか。

神話の世界の存在と思われていた『ペンギンを蒸す機械』の発見と復元。
絶滅した生物と思われていた人類の発見と覚醒。

私はまだサウナで蒸されているかのように、頭がぼうっとしていた。

氷の女王のすべすべとした白い肌は、微かに赤みがさしつつあり、体温の存在を露わにしていた。時折、まぶたが微かに動く。

人間。

恐ろしく暴力的な種族で、互いに殺し合い、ペンギンも殺し、最後には自滅して地球から姿を消したと言われている。

しかし、この人間の澄んだ顔に、私は敵意を感じない。悪意を感じない。攻撃性を見いだせない。

見つめていると不思議な安心感がある。一同は氷の女王を囲み、じっと彼女を見つめる。

聞こえてくるのは遠くで蒸気の噴き出す音と、スチームラジエーターの立てるコンコンという音だけだ。

まぶたがぴくりと動く。

開く。

息を呑む。

弾けるように寝台から立ち上がっていやしかし立ち上がれずに当然である何百年いや下手したら何千年と凍りついていた身体なのだからすぐに思い通りに動くはずはない「目覚めたぞ！」ペンギンたちがよたよたと逃げ惑う病室内は大混乱に陥るうまく立ち上がれずに転倒した氷の女王は何事か叫ぶがそれはペンギン達には聞き取れないそうだ言語だ私は意識する思念する想起する当然彼女と私たちの間で「言語による意思の疎通ができるとは限らない」私はつぶやいた当然である何百年いや下手したら何千年と凍りついていた知性なのだから神話の時代ならば人間とペンギンとは会話ができたというのが今となっては私たちはその時代の言葉を忘れてしまったのだから同じ言葉が使えるなどとは思えず

「お前たち……お前たちが……！」

使えている。

ペンギンたちが静止した。

ペンギンの言葉が使えている？

「そうか……お前たち、ペンギン人間か……人付き合いがイヤで……ペンギンになった哀れな奴……」

「しゃ、喋った……！？」

氷の女王が、しゃべっている？

彼女は長い髪を振り乱し、その目は怒りに燃えていた。

「お前たちと話すことなど何もない！ 今すぐ立ち去れ！」

一同は従った。そろそろと、短い歩幅で、言われるがままに、一列に並んで、素早くよたよたと、病室から脱出した。

ㄥ ㄥ ㄥ

廊下で緊急会議をして、対応を協議した。

数分の後、私たちはそろそろと部屋に戻った。

私が先行して様子を伺い、ロバートがヘラヘラして間を持たせ、シャックルトンが謝罪するという完璧な流れだった。そもそも私たちに謝罪すべき落ち度があったのかは不明だった。

「私も混乱して、怒鳴ってしまって、ごめんなさい。認めたくなっただけ」

氷の女王はもう落ち着いた様子で、寝台の上に腰掛けていた。座った状態でも私たちより背が高いので、ペンギン一同はやや上を見上げる形になる。

「認めたくなかった」

「うん……ああ、いくつか聞かせて」

氷の女王は背を屈めて、私たちを覗きこんだ。その柔らかな動き、ペンギンとは異なる香り、大きな瞳に長いまつげ。それらがみんな、私たちを身じろぎさせる。

「私の他に、眠っていた人間はいた？」

「いえ……見つかったカプセルは貴方のものだけです。他は、残骸らしきものがわずかだけ……」

シャックルトンが答える。

「そう……間に合わなかったのね」

氷の女王は一瞬、悲しそうな目をする。

「もう一つ。いまこの地球に、私以外に人間はいるの」

私たちは顔を見合わせた。

しかし、その反応で十分だったらしい。

「いないのね。それじゃあ、私が最後の人類、か……。私たちは負けたのね」

「負けたというのは」

「あなたたち、ペンギン人間に負けたということよ。人類は滅び、あなた達が生き残った。そうでしょう」

私たちはまたも顔を見あわせた。

シャックルトンが気まずそうに身体をバタバタ揺する。

「あのう、先程から言っておられる、ペンギン人間とは、いったい？ 私たちは、ペンギンであって、人間ではないのだが」

「……は？」

途端に氷の女王の表情が、凍りついた。

ずっと背筋を伸ばす。私たちは彼女をこわごわ見上げる。

「あなたたち、自分の出自も忘れて、何もかもごまかして生きているのね。ホント、呆れるわ」

氷のように冷たい声。私たちは縮み上がる。

「あなたたちはペンギンなんかじゃない。ペンギンはもっと不器用で、そんなに賢くない。人間の言葉を喋れるような喉も、脳も、持っていない。道具を作れる器用さもない。もっと魚臭い。もっと可愛らしい」

私たちはジリジリと後ずさる。女王は立ち上がり、私たちは壁際に追い詰められていく。

「あなたたちは都合のいい時だけペンギンで、都合のいい時だけ人間。かつて人間であることから逃げ出した存在。そのくせペンギンにはなりきれない。今のあなたたちを見ていると、もうほとんど人間みたい」

部屋は静まり返っている。

「どういことです……ペンギン人間？ よくわからない……」

私は正直に言った。

「……いいわ」

氷の女王は再び寝台に腰掛ける。足を組んで言う。
「昔話をしましょう」

ペンギン人間(3)

(歴史・人間を蒸す機械 現代ペンギン人間語訳)

人類の戦争は、危険なレベルに達しつつあった。

兵器は高度化し、大規模化し、より致命的に、効率的に、合目的的になっていった。

戦争の勃発により、より広範囲、より多数の人命が、より短い期間で、赤子が積み木を弾け飛ばすように、群れから押し出されて崖に落ちるペンギンのように、うっかりと、安易に、あっさりと、失われるようになった。地球の滅亡という言葉が現実性を帯びて語られるようになった。人類の宇宙進出に伴って、戦争の巻き添えで地球が物理的に滅ぶというシナリオは、もはやそれほど突飛な想像ではないと思われた。

私の父は憤っていた。

彼は言う。

人類は間違った方向に進んでいる。もう人類に後戻りは効かない。

殺すしかない。

人類に対する嫌気は、人類規模の現象だった。

あるものは人間をやめて、霊的な存在になろうとした。失敗した。

あるものは脳の情報構造をトレースし、電子的情報存在になろうとした。失敗した。

あるものは光合成可能な人体を手に入れ、草や木として生きようとした。失敗した。

あるものは忘我による集合的無意識への到達を目指して広域人体ネットワークを構成しようとした。失敗した。

あるものは神に祈り、仏を拝み、インターネットに願い、人類の救済を望んだ。失敗した。

あるものは月面への本格的な移住と宇宙植民艇の開発により人類の生存域を確保し、いわば人口密度を下げることによって戦争を回避しようとした。失敗した。

あるものはペンギンになり、氷の上を滑って生きようとした。成功した。

あるものは人類すべてを滅ぼすしかないという結論にいたり、そのための兵器を建造した。

それが父であった。

それが『人間を蒸す機械』であった。

創りだされた『人間を蒸す機械』は、幾多の実験の末についに起動し、人間を蒸し尽くした。託された願いに対して誠実に。致命的に。効率的に。合目的的に。

人間がいなくなった地上には、仮初の平和が訪れた。

しかし、『人間を蒸す機械』は、ペンギン人間を蒸しそこねた。だってそもそも、彼らはもはや厳密に人間ではなかったのだから。こうして地上にはペンギン人間だけが残った。平和が仮初

であった所以である。

世界から、『蒸す機械』は忘れられた。南極の氷の中に閉ざされた。

信じられないことに、父は人間をすべて否定しながら、娘をコールドスリープに押し込めた。父は私を人間扱いしなかったのだ。私はそう思う。父が私のことを愛していなかったのだとは思わない。それが私自身であるかはともかくとして、ともかく父にとっての娘を、父は愛していたのだろう。だからこそ、私は醜い人間にはさせてもらえなかった。私は人間にはなれなかった。

そうして一人の少女も、世界から忘れられた。南極の氷の中に閉ざされた。

私は今となっては父にどう怒って良いのかわからない。

怒るべきなのかも分からない。

父の最後の言葉はもう覚えていない。何しろ、すごく寒かったから。

ペンギンを蒸す機械(1)

氷の女王が話し終えると、あたりはしんと静まり返って、ふたたび蒸気の声とハンマー音だけになった。

「『蒸す機械』は、人間を滅ぼしたものだっただけですか……」

私たちは呆然とした。

「しかし、待ってください。確かにこの『機械』には、飛行艇としての能力が備わっている。我々の分析では」

シャックルトンが図面を引っ張り出してきて説明しようとする。

「そりゃ、飛べるわよ。だって、一箇所にとどまっていたんじゃ、人類全部を蒸し尽くすことなんて出来ないでしょう」

氷の女王の言葉に、部屋の誰もが戦慄する。私はあの巨大な円筒が空を飛び、大地を蒸していく様子を想像する。

「そんな……それでは、とても起動など出来ない。掘り出すべきものではなかった」

シャックルトンが、この『機械』に賭けてすべてを捨ててきた男が、頭を抱える。

「馬鹿な……神話と話が違うだろうが」

ロバートが言った。

神話では、結局『ペンギンを蒸す機械』がどのようにして平和をなしたのかについては直接語られない。だから、神話と直接に矛盾するわけではないかもしれない、と私はぼんやり考えた。

「あなたたちの神話がどうなっているのかは知らないけれど、まさにその当時を、その時代を生きていた私としては、今話したのはすべて事実だと言い切れるわよ。もちろん、私はこうして眠っていたから、人類が滅びるその瞬間に立ち会ってはいないけれど」

「ほら見ろ、見たわけじゃないんじゃないか」

ロバートは語気を強めた。

「あんまりにも長く眠りすぎて寝ぼけてるんじゃないかねえか。それに俺たちペンギンが昔は人間だったと？ 巫山戯るのも大概にした方がいいぜ。血なまぐさい人間なんかと一緒にすんじゃない」

私たちは気まずそうに氷の女王の様子をうかがった。また彼女が激昂するのではないかと心配になったのである。しかしどうやらその様子はなく、彼女はただ、私たちを憐れむような目で眺めているだけだった。

「あなたたち、その格好、ペンギン人間にも軍人というのがあるようね。それじゃあ、ペンギン人間は戦争をしているということかしら」

ロバートはふんと鼻を鳴らした。

「同士討ちを嫌って、人間同士のコミュニケーションを諦めてペンギンになったのに、そんなに流暢に人語を操り、けれども互いにわかりあえず、また殺し合いをしている。あなたたちは何も変わっていない。父が否定した存在から何も変わっていない」

その言葉は冷たく、悲しかった。

その時だった。大きく突き上げるように、地面が響いた。

大きな縦揺れだった。私たちはバタバタとよろめき、フリッパーでバランスを取るが、こらえきれず倒れるものもいた。氷の女王は三度寝台に尻もちをついた。けたたましいベルが鳴る。

「どうした！」シャックルトンが構内電話の受話器をとって叫んだ「今の揺れは！」

もう一度、先程よりは小さいが確かな揺れがあった。建屋がぐらつく。遠くで轟音。心臓のうねり。

「注水が！？」シャックルトンは電話では声が大きくなる癖があるのか、それとも構内電話の品質はあまり良くないのか。叫ぶ。

「いや、無理に止めるな！　まず現場を確認しろといつも言ってるだろう！」部屋の一同は彼をじっと見守る「構わん！　私がそちらに行く！」

シャックルトンが受話器を叩きつける。存外にも気が短い男なのかも知れず、あるいは今しがた聞いた話による動揺からまだ逃れずにいるらしい。シャックルトンは「失礼」とだけ言って、すぐに部屋を出ていこうとする。

その時、嫌な予感としか言いようのない直感が、私の頭に走った。

私は周りを見渡す。右を見て、左を見る。シャックルトンの向こう側を見る。

いない。

「ロバート？　ロバートはどこです？」

やつの姿が見えない。

「さっきまでここにいたが……」

いない。

シャックルトンが何かに気付いたような顔をして、弾かれたように構内転送配管のターミナルに駆け寄る。

「……無い」

彼は透明なカプセルを手にしている。

ロバートが彼に渡した小包を収めたはずのカプセルに違いない。

「スコット殿は、あれを起動するつもりだ」

シャックルトンの顔が青ざめる。

「『ペンギン蒸す機械』を！？」

叫んだのは氷の女王だ。

「冗談じゃない。話を聞いてなかったわけ？　今度起動したら、おしまいよ。あの機械は周囲の無意識に合わせて動く。認識が機能を決める。あなたたちがあれを『ペンギンを蒸す機械』だと思っていたからには、今度はあなたたちが蒸され、滅亡することになる」

「シャックルトン司令、あの小包は何なのです」

私は急き込んで聞いた。

「あれは……『インカのめざめ』です」

「『インカのめざめ』！？」

「すなわち『大地の恵み』です。これを運んでくる必要があった。スコット殿に運んできてもらったのです。始祖ペンギンたちと生まれの地を同じくする作物です。ジャガイモですよ。『ペンギンを蒸す機械』の熱機関にはスターターが必要だ。火花を散らすだけの電気が必要なのです。起動時にだけ」

「まさか……」

「つまり、まず下準備として『インカのめざめ』を蒸す。そのあと電極を差し込むのです。ジャガイモ電池ですな」

「ひょっとして、それが……」

「ポテト作戦」

ポテト作戦だった。私は頭を抱えた。

「つまりそれが『大地の恵み』。『海の恵み』の方は、沖へ出れば海水が取れますからそれでいい。……いや違う。注水だ！ それでか！ 今しがた『機械』のメイクアップタンクへの注水が始まりました。技師が言うには、誰も操作しないのに、独りでに。これで起動条件が揃う。いかん、熱機関へ急ぎましょう」

我々はシャックルトンを先頭に、病室を飛び出した。

㊦ ㊦ ㊦

「そもそもなぜロバートは『機械』を起動しようとした」

走りながら私は問う。走りだしてみれば、歩幅の関係で氷の女王が圧倒的に速い。私たちはついていくのがかなり苦しい速さだ。

「私が彼に理想を語りすぎたのかもしれない。彼は『ペンギンを蒸す機械』が、我々ペンギンを救済し進化させる装置だと素朴に信じているところがありました。だからこそわざわざ最適なポテトを確保しに行ったのです。私はもっと簡易な電池でいいと思いましたが。彼は象徴性を重視しました。品種にまでこだわった。『インカのめざめ』は、鮮やかな黄色、コロコロと小粒な姿、栗やサツマイモを思わせるホクホク感、そしてバターのような濃厚さ。大地の恵みとして完璧な存在なのです」

氷の女王が転がっていた氷の塊を蹴飛ばす。「おっと、ごめんなさい！」ペンギン技師たちが逃げ惑う。蒸気が噴き出す。熱が暴れ出す。視界がどんどん奪われる。

「先ほど私が、とても起動できないと言ったでしょう。それで彼は、自分一人で起動させようと思ったのではないのでしょうか」

そうだろう。私は思う。

「あいつは思っていた以上に、宗教的な、神話的なものの見方に傾倒していたようですね」

思えば、再開して以来この半年、ロバートは神話の話をよくしていたではないか。

「ええ、そうでしょう……彼も私と同じで、人生をこの『機械』に賭けてしまった。私は自身の名誉と、国家のために『機械』を蘇らせるつもりだった。彼は神話の成就の方を優先した。皮肉

なものです。軍人は彼の方なのに」

「軍人なんて案外そんなものです。宗教にすぎるのも国家にすぎるのも、たいして変わらない」
「あなたたちって」横をずんずんと早歩きする氷の女王が、怪訝な顔で言った。「本当に人間み
たいなことをしゃべるわね」

ペンギンを蒸す機械(2)

「どうなっている！」

シャックルトンが機関室の扉をたたき破る勢いで、部屋に入るなり叫んだ。

「プライマリタンクの水量91%で注水は止まりました。ポンプは今は両系停止しています」

「そういうことではない！ 燃料は！ 燃料系のバルブ開閉は動くか確認したか！」

「い、いえ」

「お前たちは本当に馬鹿なのか！」

シャックルトンが吠えた。

「司令！ 駄目です！」技師ペンギンがフリッパーをばたつかせる。「バルブ、動きません！」

「手で動くか試せ！ ドレン開けろ！」

「先ほどの揺れでリフトが故障して、たどり着けません！」

「緊急時にリフトを使うな！ 何時も言っているだろう！！」

技師は飛び跳ね、走っていった。

「それで」シャックルトンはなんとか落ち着きを取り戻そうと深呼吸して「スコット殿はここに来たかね。軍人だが」

「い、いえ、ここには誰も……」別の技師が答える。

「直接上に向かったか」

㊦ ㊦ ㊦

轟々と蒸気が吹き荒れる。白い闇の中に手を伸ばし、冷たい金属を補助鉤でつかむ。混乱の最中、床に残されていた機械多指を借用した。

恐らくこのハシゴは人間用だ。人間がこの『機械』の頂上へ登るときに使うものだ。私たちペンギンには、間隔が広すぎる。身体を大きく伸ばし、肩を前に抱き込んで、ようやく機械多指の鉤が次のハシゴに届く。

人間たちはどのような気持ちでこの『機械』を起動し、滅んでいったのであろうか。彼らもまた、この激しい蒸気の中で、凍てつくハシゴを登ったのであろうか。

機械多指は1セットしか転がっていなかった。だからシャックルトンはここにはいない。氷の女王は少し走って息切れしていた。長い眠りから覚めたばかりでこのハシゴをよじ登るのは無理だろう。

だから私独りだ。次の段に機械の腕を伸ばす。

私は独り、相棒を追う。

ロバート・スコット。

今ならお前が、私を騙してまでここに連れてきた理由が分かる気がする。

機械の腕の伸びた先に、もうハシゴは無かった。

「ロバート！」

赤茶けた金属が広がる。ここは『ペンギンを蒸す機械』の頂上。すぐ向こう、『腕』が飛び出しているのか、あるいは差し込まれているのか、巨大な大穴から蒸気がもうもうと噴き出す。その手前に男は立っている。その背後に私は立っている。

「ジェイムズ、遅かったじゃないか」

私と同じく、機械の腕を背負ったロバートは、『インカのめざめ』を器用に弄びながら振り返る。彼が背負っているのは私が拝借してきた精密作業用ではなく、高所作業などで使われる四腕型だ。機械バネに蓄勢された弾性エネルギーを使って、その指で『つかむ』事ができる。鉤で登ってきた私より、相当登りやすかったはずだ。

「待っていたんだ、お前を」

錆びた『機械』の屋上は凍りついてつるつると滑る。私はふらつきながら、ゆっくりとロバートに近づいていく。

「わざわざ俺を待つこともなかっただろう」

「いや、待ったね。お前が必要だから」

「一体何に」

「決まってるだろう。これからこの『機械』の試験飛行だ。ジェイムズ・ロス。お前が操縦するんだよ」

そうだ、お前はそう言うだろうと思った。ロバートは機械の腕で芋をお手玉のように弄ぶ。

「.....なぜ、俺が」

「不満か？ お前はやりたがるだろうと思っていたよ。ジェイムズ。もう一度、空が飛びたいだろう？」

お前は知っている。俺がかつてパイロットを諦めたことを。本当は潜水艦の中で耐え続けるのが我慢ならなかったことを。

「これはただの飛行艇じゃない。『ペンギンを蒸す機械』だぞ。お前は世界を滅ぼしたいのか」

「必要なら俺は蒸されるさ。それが世界を平和たらしめ、進化させ、救済を与える手段ならば」

ロバートは事も無げに言った。

「馬鹿を言うな。お前一人では済まない。すべてのペンギンが蒸される」

「そっちこそ馬鹿じゃないのか。それはあの氷漬け人間の言ったことだろう。どこに証拠がある。俺たちの神話のほう信用できるとは思わないのか。確かにペンギンは蒸されたが、ならばなぜ俺たちはここにいる。つまり、蒸されたのは一部のペンギンだけだ」

「それを言うなら、所詮神話は神話だ。俺には信用出来ないね」

凍てつく風が轟々と吹きつけ、目を開けているのもかなわない。

「.....そうか、ジェイムズ。それがお前の答えなんだな」

ぐっと、『インカのめざめ』が握りしめられる。

瞬間。動いたのは二人同時だった。そう、動き出したのは同時であったはずだった。

私は拳銃を抜く。だが圧倒的にロバートが速い。動きに躊躇いがない。私のフリッパーから鮮血が噴き出す。その熱に湯気が上がる。吹き飛ばされた拳銃が宙を舞う。私は身体を転がしながらそれを左肩の腕で受け止め、機械指で引き金を一一肩に衝撃。猛然と迫るロバート。床に叩きつけられ、喉に食い込む冷たい機械の腕。機械多指を固定した肩の関節がねじ切られる不自然な音。一発。二発。脳が震え、世界が揺れる音。撃たれた肩の痛みが遅れてやってくる。鉄と油の味。吐き気を催す苦味。急速に血液が失われ、身体の力が抜けていく。油圧を失った機械。

「いいか。ジェイムズ・ロス。この腰抜けめ。俺は失望したよ。お前が自分の夢よりも、あんな醜い魔女一人の言うことにくろっとやられちまうなんてな」

二本の腕で、ロバートは私の身体を釣り上げる。片目をわずかに開くと、彼が残り二本の腕で、『インカのめざめ』に電極を挿しているのが見える。

「お前はせいぜい、蒸されるがいいさ」

私の身体は、投げ込まれる。

ペンギンを蒸す機械(3)

「動きます！」

建物が大きく揺れる。それはもはや、ただの振動ではなく、大地が傾いているように感じられる。

「ロス殿、間に合わなかったか！」

シャックルトンが大きく叫ぶ。この身体の大きなペンギン人間は、さっきから部下に指示を出し、『ペンギンを蒸す機械』の無力化に躍起になっていた。燃料を抜こうとし、油圧を落とそうとし、水を抜こうとし、蒸気圧を解放しようとした。しかしそのどれもうまくはいかなかった。そして、本当にうまくいかせる気持ちがないように、私には見て取れた。本当の、本気の安全装置を、彼は起動できずにいた。彼は、あえて、自分へのパフォーマンスのように、もがいていた。

「ここには危険です、司令！」

技師が絶叫する。『蒸す機械』はまもなく飛び立つだろう。そうなれば、ペンギン人間たちが取り付けた測定機器や、補修作業用の足場の類はすべて引き千切られ、周囲に落ちてくる。ここにいれば当然それらの下敷きになる。もっとも、その後に蒸されるのであれば結局は同じことだが。

シャックルトンは一瞬、迷いを見せた。

私はそれで、本当に同じなのだと思う。彼もまた、この機械に取り憑かれているのだと思った。

「下がるぞ！」

下がるということは諦めるということだ。あるいは、成し遂げるということだ。

☁ ☁ ☁

私とシャックルトンと技師ペンギンたちは、氷の切り出し場まで後退した。

吹き荒ぶ蒸気で、ペンギン人間たちは首元まで白い空気に浸かっている。

巨大な円筒の頂上から腕が大きく伸び上がり、身体の何倍もの長さになって八方に開くと、座頭蜘蛛のように『蒸す機械』は意外なしなやかさで立ち上がる。そうして更に蒸気の圧力を増す。

「あれが……あれが、『ペンギンを蒸す機械』……」

シャックルトンが囁くように言った。

「あれが……あれが、『人間を蒸す機械』……」

父が囁くように言った。

「そう、あなたたちを蒸す機械」

私は言った。

「あなたたちを蒸して、殺す機械」

轟音をあげて、『機械』は徐々に浮き上がる。やがて蜘蛛の足を棄てる。未練はない。進化に必要な過程だ。切り離されたそれらが地面に叩きつけられ、突き刺さり、引き裂く。氷の大地が悲鳴を漏らす。

「まだ、まだ起動するつもりではなかったのだ」父が言う。

「あれはとても危険だ」シャックルトンが言う。

「あなたたちを蒸して、絶滅に至らしめる機械」私が言う。

「あれは、スコット殿が操縦しているというのか」シャックルトンが呆然とした表情で問う。

「いいえ、『蒸す機械』に操縦は必要ない。想像と期待で動く」慚然とした顔で父が答える。

「きっと、もうあの腹の中に飲み込まれた後でしょう」私が告げる。

未だ『機械』は大きく飛び立たない。一定の高度を保ったまま、不本意にもペンギン人間たちにつけられた種々の観測計器を引きちぎり、地面に落としている。これからこの世界中を飛び回るのだ、身軽にならなくてはならない。父が双眼鏡でそれをじっと見つめる。高所作業用の四腕機械腕と、精密作業用の多指型機械腕が、『機械』から吐き出されて氷の海に落ちていくのを父は見る。

「我々は取り返しの付かないことをしてしまったようだ」

父とシャックルトンが言った。

一層濃くなる湯気の中、私は天を見上げた。南極の空は暗い。低く覆い被さり、私たちを閉じ込める。

「いったい、いつからが取り返しがつかなかったのでしょうか」

私はつぶやいた。

ペンギン人間が生まれた時から？

人類が生まれた時から？

生命が生まれた時から？

凍てつく吹雪とむせ返る蒸気の中、時間の間隔が失われる。私たちが黙っていたのが一秒であったのか、一時間であったのか。私にはわからない。

「……あのう」

シャックルトンが身体を大きく左右に揺する。

「今更このようなことを、大変失礼なのだが……人間殿、なんとお呼びすればよいでしょうか」

「え？」

私は面食らった。

「名前を聞いてるってこと？」

シャックルトンは気まずそうにパタパタやった。

「ええ……はじめに、貴方がはじめに目覚めた時にうかがうべきだったのですが」

私は少し笑った。もう人間は私一人しかいないのだから、人間殿と呼んでくれればそれでいい、とごまかそうかと思ったけれど、シャックルトンの真剣な目を見て、名前を教えてあげることにした。

シャックルトンは私に向き直り、私の名を呼んだ。

「お願いがあります」

父は言う。

「私はお前を蒸すわけにはいかないのだ」

シャックルトンが言う。

「どうやら我々ペンギンは、いえ、ペンギン人間は、失敗したようです」

「人間は醜い。しかしお前は違う。お前はお母さんによく似ている。同じだ。お前は美しい」

「本来なら貴方を起こすべきではなかった。すべて私が愚かだったのです」

「人間がお前の母を殺した。私はお前のことは失わない」

「無駄なものを見せてしまった。忘れてくださいとは言いません」

蒸気が一際大きく噴き出す。シャックルトンの姿が見えなくなる。父は顔を歪める。

「お前は美しいものを探しておくれ」

「むしろ、私たち一族の失敗を、見届けていただくことが出来たのかもしれませんが」

「さあ、ここに入るんだ」

「実は、『ペンギンを蒸す機械』の方は、スコット殿を送り出した時点でほぼ解析が終わり、後は補修を残すのみでした」

「ほら、ここに私たちの写真が貼ってあるだろう」

「ですのでこの半年は、この人工冬眠装置の研究に費やしました」

「……いや」そう言って父は手を伸ばし、私たちが三人で写った写真を外した。懷から小さなロケットを取り出し、代わりにカプセルの内壁にかける。それが母の写真を収めたものだと、私は知っている。「これでいい。母さんが一緒だ」

「うまく復元できていると良いのですが」

何度目かわからない轟音と地響きが、人工冬眠カプセルを跳ねさせた。

「さあ、もう眠る時間だよ」

「眠っていた所、邪魔をしてしまって申し訳ありませんでした」

カプセルがゆっくりと閉じられる。

「あとは私たちが見届けー」

人間も、ペンギン人間も、ひどく自分勝手だ。強欲で、プライドが高く、基本的に最悪なやつらだ。

けれども別れは少し寂しい。

忙しかった父が、一度だけ私を連れて遠くへ出かけたことがある。

なにしろそれが本当に一度きりだったから、私はよく覚えているのだ。その日もこんなからりとした晴れだった。父は私を車に載せ、ずいぶん遠くまで走った。その頃私たちが住んでいたのはあの大きな港町だったけれど、あれはかなり山道を登ったように記憶している。ハンドルを握る父は、いつもどおり寡黙ではあったが、私の他愛ない話にいつもより多めに相槌を打ってくれた。

連れて行かれた場所は、山あいの小さな村を抜けた先の、色とりどりの花に囲まれた草地だった。

まるで世界に忘れられた秘密のように。

明るい日曜日の青い空が、風に揺れる花々に祝福されていた。

幻想的な光景にはしゃぐ私を、父は微笑みながら見つめていた。

それは、母が去った後に父が見せた唯一の笑顔だった。

きっと父にとっては、あれは美しい光景であつたに違いないのだ。

私は半ば転ぶように、半ばふざけて、草地に身体を転がし、仰向けに大の字になった。

太陽が眩しい。風に波打つ草花の囁き声が耳をくすぐる。先ほどまで姿の見えなかった美しく歌う小鳥が、高く飛んで行く。

春の陽気が、私の身体をあたためる。太陽の熱が身体に染みこんでいく。

そろそろ、目を覚まそうか、と私は思う。

目がジンジンと痛む。太陽が突き刺さって頭が割れそう。私は思わず手で顔を隠そうとするが、手の神経がズルリと抜け落ちたように、腕は動かない。血がまだそこまで回っていない。私は顔をしかめる。目をぎゅとつむったまま、息を吸う。吐く。吸う。吐く。血をめぐらせる。指に力を込める。身体を融かす。長い長い氷の眠りから。

二度目の目覚めは一度目よりもつらくて、けれどもすがすがしかった。

身体をおこすと、そこは一面の花畑が広がっていた。

かぜのおと。

とりのこえ。

今日は何曜日だろう。私は考えた。日曜日だといいな、と思う。こんなに素敵な空だもの。

私の入っていたカプセルの外壁はボロボロに風化し、ところどころ剥がれ落ちている。周りを見渡しても、低木よりも高い構造物は見え、相当の月日が流れたものと見える。『機械』も見当たらない。今度こそ仕事を完遂して、どこかへ消えてしまったのかもしれない。私は三度、大きく息を吸う。肺の中を入れ替える。血液の中を入れ替える。頭の中を入れ替える。

ギュッ、と奇妙な声が出た。

振り返ると、そこにいたのは、不器用で、そんなに賢くなくて、人間の言葉を喋れるような喉も脳も持っておらず、道具を作れる器用さももちろんなくて、少し魚臭くって、とっても可愛い。

太陽を受けて輝く白い体毛。黒い頭とフリッパーとのコントラスト。首元の鮮やかなイエロー。パタパタと身体を左右に揺らし、こちらを覗きこむ、好奇心にあふれた小さな目。

人間がつかない方のペンギンが、そこに立っていた。

「野生のペンギンがいるってことは、今度こそ人間はいないのね」

私はまだうまく声がでない喉で囁くように言った。

ペンギンは、ギュッ、と鳴いた。首を伸ばしてこちらを見つめる。

そうして首を伸ばす。もっと伸ばす。よちよちと更にこちらに近づく。首を伸ばす。覗きこむ。私の寝ていたカプセルの中を覗き込む。

「なあに？」

私は身じろぎする。身体を捻った瞬間。何かがこぼれ落ちた。

「ギュッ」

ペンギンが嘴で何かをつつく。

拾い上げると、それはすべすべした卵型、まだ冷たいけれど、確かに薄緑の芽が生えている。私はそれをじっと眺める。

ペンギンもそれを興味深そうに眺めて、時折身体を左右に揺らす。

パタパタ、パタパタ、と。

しばらくそうしていると、私は急におかしさがこみ上げてきて、一人で大きな笑い声を上げた。

ペンギンが不思議そうに見上げる。

ひとしきり笑った後、今度こそ本当に最後の人類になった彼女は、立ち上がって言う。

「それじゃあ、これ植える場所を探しましょうか」

「ギュッ」

「南極を一面『インカのめざめ』畑にしてやるのよ」

「キュ」

「きつととっても美しくなるわ」

「ギュッ」

「ポテト作戦ね」

ポテト作戦ではなかった。

(完)

ペンギンを蒸す機械

<http://p.booklog.jp/book/95890>

Special Thanks to @zignika

<https://twitter.com/zignika/status/571990369883189248>

著者：笹帽子

著者Webサイト：<http://www.sasaboushi.net/blog/>

Amazon著者ページ：<http://www.amazon.co.jp/笹帽子/e/B00TOEWKRE/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/95890>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/95890>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ